



# 5章

## 平和の語り手

概説

上原美智子

翁長安子

平良啓子

玉木利枝子

仲井間小夜子

中山きく

外間邦子

本村つる

山里節子

コラム 平和を語る同窓会

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章

## 5章 平和の語り手

沖縄戦は1945年で終わったわけではない。本章では、長らく沈黙を余儀なくされてきた体験者たちが「語り手」へと歩み出した軌跡を辿り、彼女たちが未来へ架けた「記憶の橋」の意義を改めて問い直す。

吉川麻衣子（沖縄大学教授）

わたり、個人の生活と社会全体に深く刻まれてきた。

体験者たちの語りは、戦後長らく、沈黙と周縁化のなかに置かれた。敗戦後の混乱と生活再建、さらに米軍統治下という状況下では、戦争体験を公に語る社会的余地はほとんどなかった。記憶は「生き延びるために押し込めざるを得ないもの」となっていったのである。何より、凄惨すぎる記憶を「思い出したくない」「忘れたい」と願う拒絶は、語ることを拒む重い沈黙として、個々人の内側に深く埋め戻されていった。語られなかった体験は忘却

されたのではなく、語るための条件も心の平穏も整っていなかったといえる。

さらに戦後初期の政府による慰霊は「英霊顕彰」の枠組みが優先され、住民の体験は「殉国の美談」へと抽象化された。特に女性たちの体験は、性暴力や過酷な避難生活、戦後の困窮を支える重責など、公的歴史からは見えにくい位置に置かれ続けた。家庭や地域においてさえ、凄まじい記憶を分かち合うことは平穏を乱す「不都合な過去」として忌避され、彼女たちは沈黙を余儀なくされる存在であり続けたのである。

### 沈黙の背景と 不可視化された記憶

沖縄戦は、1945（昭和20）年の終戦をもって過去となったわけではない。住民を巻き込んだ地上戦は家族や地域社会を破壊し、その傷跡は戦後の長い年月に

### 戦場体験の位相 — 動員された少女と 年少の子どもたち

本章で取り上げる9人の女性は、時代的制約や葛藤を抱えながらも、やがて「語る」という重責を引き受けた人びとである。その体験の位相は、大きく二つの文脈に分けられる。

第一に、学徒隊や組織へ動員された女性たちである。本村つるは「ひめゆり学徒隊」として南風原陸軍病院での看護に動員され、凄惨な撤退戦の中で多くの友を失った。中山きくは「白梅学徒隊」として、軍医の補助や死体埋葬という、少女の身には余る過酷な任務を課された。また、翁長安子は「郷土部隊」の一員として軍の

組織内に身を置き、組織の末端で戦争の不条理を経験した。彼女たちは、仲間を失う光景を軍の一員としての「責任」とともに記憶に刻むこととなった。

第二に、守られるべき幼さで戦場へ放り出された「年少者」としての視点である。平良啓子は学童疎開船「対馬丸」の撃沈という、子どもを狙った暴力から奇跡的に生還した。一方、外間邦子は同じ対馬丸で二人の姉を失い、遺族として終わりのない喪失感を抱えることとなった。地上戦の戦火を彷徨った者たちの記憶も凄絶を極める。当時国民学校3年生だった上原美智子は、逃亡のさなかに家族を失い、収容所生活という極限状態を生き延びた。玉木利枝子もまた、降り注ぐ砲弾

の中を逃げ惑うなかで家族を失い、死の恐怖を骨髄に刻んだ。さらに、沖縄本島外での被害も忘れてはならない。山里節子は石垣島で、軍命による避難が招いた「戦争マラリア」によって家族と死別するという、不可視の暴力に直面した。また、仲井間小夜子は南洋諸島のロタ島で、米軍の包囲網に晒されながら飢えと隣り合わせの戦時下を生き延びた。

彼女たちの歩みはそれぞれ異なる重みを伴うが、共通しているのは、記憶を「封印すべき過去」として抱え続け、そこから踏み出すために凄まじい内省と社会との摩擦を経験してきた点である。

## 記憶の転換点 —「抵抗」としての語りと 社会的実践

1980年代の教科書検定問題を機に、彼女たちは「忘却に対する闘争」を開始する。本村つるは「ひめゆり平和祈念資料館」の設立に奔走し、証言活動の場を確立した。中山きくもまた、白梅学徒隊の足跡を記録し伝え、学徒の垣根を越えた継承に尽力した。

山里節子は石垣島から戦争マラリアの悲劇を告発し続け、平良啓子や外間邦子

は対馬丸記念会の活動を通じて、子どもたちが犠牲になる戦争の罪悪を問い直した。上原美智子、玉木利枝子、仲井間小夜子、翁長安子らも、葛藤を乗り越え、それぞれの壮絶な「個」の記憶を、修学旅行生や市民への「公」の証言へと転換させていったのである。それらの活動は、「再び沖縄を戦場にさせない」という峻烈な意志に基づく「未来への抵抗」であった。

## 「生活者の歴史」の構築 —ジェンダーの壁を 越えた問い

彼女たちの語りは、「軍事史」では掬い取ることのできない、生命の尊厳をめぐる「生活者の歴史」の再構築である。「戦争は終わっていない」という実感を暮らしの視座から紡ぐ言葉には、国家や軍の論理とは異なる独自の歴史認識が息づいている。数字や勝敗よりも、失われた一人ひとりの名前や震える声といった「細部の真実」こそが、歴史を動かす力として立ち現れるのである。

また、これらの語りは、女性であるがゆえの抑圧や、戦後のジェンダー構造に対する問い直しでもある。家族を支えるために自らの負った深い傷を後回しにせ

ざるを得なかった女性たちが、公の場に立ち、自らの痛みを言葉にすることは、沈黙を強いてきた歴史そのものへの「静かなる抵抗」であった。彼女たちの言葉は、単に過去の出来事を指し示すだけではない。それは、現在の沖縄が直面し続けている基地問題、差別、貧困、そしてあらゆる暴力の根底にある「戦争の地続きの影」を照らし出している。彼女たちの語り手としての生涯は、現代社会の課題と戦争体験を切り離さず、平和とは何かを問い続ける不断の実践そのものだったのである。

## 記憶の継承—「体験者なき時代」への架橋として

「体験者なき時代」が現実となりつつある今、彼女たちの語りの意味は、いっそう重みを増している。かつて「忘れたい」と願い、沈黙していた彼女たちが封印を解き、語り直してきた歩みは、記憶を社会に手渡す「橋」としての役割を果たしてきた。

彼女たちの言葉を受け取ることは、単に過去の事実を知ることにと留まらない。問いを自らの問題として引き受け、対話を始めることである。継承とは、語られた痛みを自分のこととして「想像し続ける責任」を分かち合うことにほかならない。

戦後80年の節目にあたり、彼女たちの歩みを歴史的文脈に位置づけ、その意義を改めて世に問いたい。築かれた「記憶の

橋」を渡り、次なる時代をどう歩むべきか。その答えは、戦後世代の私たちの実践に委ねられている。



「今年が最後かもしれない」と兄弟ら親族が刻まれた礎に触れる女性（88）。「戦争を二度としないください。皆さんで訴えてください」と話した＝2022年6月23日、糸満市摩文仁の平和祈念公園（小川昌宏撮影、琉球新報社提供）



(2025年11月撮影)

## 上原美智子

Uehara Michiko • 1935-

### 修学旅行生に平和講座 遺骨収集活動も地道に40年

1935（昭和10）年、摩文仁村小渡（現糸満市大度）に生まれた。字小渡は人口100人ほどの小さな集落で、ほとんどが農家で貧しい生活だった。当時の女性は学問をせず親から教えられる「サ・シ・ス・セ・ソ」という家業の手伝いが中心で、サは裁縫、シは手芸、スは炊事、セは洗濯、ソは掃除ができれば十分であった。そうした中でも、小渡出身の大城ハル（1890=明治23=年生まれ）は1905年から41（昭和16）年まで、女性の先駆けとして小学校教師として活躍した。幼少のころ、近隣に憧れのハル先生（当時70代）がいた。今でも米須小学校正門の側に「大城ハル先生御遺徳顕彰之碑」がある。自分もぜひ先生のようになりたいと強い希望を持っていた。

沖縄戦があった45年は摩文仁国民学校3年生。父は防衛隊として召集され行方知れずの状態だった。米軍による艦砲射撃が始まると家族で近くのアマンソーガマ（小渡）に避難した。摩文仁村の北部疎開指定地は恩納村名嘉真だった。敵機が来襲した3月24日の夜から小渡の住民は移動を始め北部山中での苦しい避難生活を強いられた。4月下旬に末弟が栄養失調で亡くなった。5月中旬に米兵がやってきて捕虜になり、石川収容所に収容された。防衛隊の父はどこで亡くなったかも分からずじまいだった。戦後は全て

の物が不足しており、母子家庭だった美智子の家は生活を維持するだけでも大変だった。このため母は美智子が三和中学を卒業する頃、軍作業に就いて働いてくれるよう望んでいた。しかし中学校の先生たちが熱心に美智子を進学させるようにと母を説得してくれて、大度集落から戦後初の女性として糸満高校へ進学できた。その後、琉球大学教育学部保健体育科へと進んだ。家庭に負担をかけないようにアルバイトを掛け持ちしながら自力で卒業した。

念願の教師になり三和中学校を振り出しに、島尻地区の学校に勤務した。体育を専門としており、在職中は、沖縄県女子体育連盟会長、沖縄県エアロビック連盟会長の要職を務め、海邦国体では婦人集団演技責任者として、琉球芸能を取り入れた集団演技を成功裡に導いた。途中、県教育庁社会教育主事の役職を13年間担った。県婦人国内研修事業では多くの女性リーダーを養成すべく6年間にわたり県外へ研修団を引率した。研修を受けた

女性は地域リーダーとして活躍している。糸満市立西崎中学校の教頭を最後に勸奨退職した。

退職後は地域社会教育に携わり公民館社会教育指導員、社会教育委員として活躍した。地域の老人会にも積極的に参加し早朝のラジオ体操を30年間続けた曙願寿会は、ラジオ体操全国表彰を受けた。

戦争体験について長らく人前では語ることはなかったが、中学校の生徒たちにせがまれて自身の体験を初めて語り始めた。沖縄県平和祈念資料館友の会に属し、修学旅行の県外校への平和講話や平和学習講師として活動している。語り部活動の一方、父の遺骨がいまだにどこにあるか分からない中、父の遺骨を見つけたいとの思いが募り、遺骨収集ボランティア活動を40年間続けた。各地の塚から何十体もの遺骨が見つかり一人一人の無念さが胸に迫った。

2025年度沖縄県功労者（平和・人権推進部門）として表彰された。（仲村真）



骨収集活動をする上原美智子（右端）2007年1月28日 糸満市

# 翁長安子

Onaga Yasuko • 1929-

## 「君たちは生きて、語ってくれ」 隊長 最期の言葉、証言者の原点に



(2018年2月撮影、琉球新報社提供)

翁長安子は1929（昭和4）年、真和志村（現・那覇市）に生まれ、少女時代は、常に戦争の影とともにあった。小学校に設けられた奉安殿を磨き、御真影と教育勅語を敬う。軍国主義教育が日常に浸透するなか、43年に沖縄県立第一高等女学校へ進学した。1年間の楽しい学園生活も束の間、戦況の悪化とともに学び舎は軍の駐屯地と化す。壕掘りなどの土木作業で、鉛筆を持つはずの手は傷だらけになったが、「お国のため」という言葉を疑うことなく、過酷な労働に耐え続ける日々であった。

45年2月27日、家族は北部へ疎開したが、安子は一人残り、憧れの先輩を追って軍を志願し、水汲みや食料運搬に従事した。配属先は、住民を中心に編成された郷土部隊「特設警備第223中隊（永岡隊）」である。しかし、首里戦線が激化した5月27日、第32軍の南部撤退に際し、永岡隊には「郷土部隊は最後まで首里を守れ」という非情な命令が下った。その翌日、安國寺壕に追い詰められた隊を待ち受けていたのは、米軍戦車による「馬乗り攻撃」であった。逃げ場のない壕の中で味わった極限の恐怖、そして主力部隊に見捨てられ、盾とされた理不尽な絶望。15歳の少女に刻まれた深い憤りは、今日まで安子が命を懸けて訴え続ける「軍は住民を守らない」という戦場の真実へと繋が

っている。

凄惨な安國寺壕を脱する際、隊長のベルトを必死に掴み「親心」を感じるも、足を滑らせ崖下へ転落し孤立する。怪我を負いながら匍匐前進で崩落した金城橋に辿り着き、「お父さん、お母さん、助けに来て。ここで死にたくない」と泣き叫んだ。途中、一日橋前でスパイ容疑をかけられるも、永岡隊長の名によって辛うじて解放され、6月3日、不屈の思いで隊へ合流を果たした。

約3週間を激戦場で彷徨し、部隊の約8割が斃れた凄惨な極限下。米軍から投降の放送があった6月22日朝には、生きて辱めを受けるよりは自決も考えた。しかし、隊長は一人ひとりと暗闇の中で手探りの握手を交わし、「君たちは若い。生きて、こんな戦があったことを語ってくれ。死ぬな」と遺志を託した。最期に安國寺住職であった隊長から先祖伝来の数珠を首にかけられた安子にとって、この言葉が人生を貫く羅針盤となった。

46年1月、収容所から戻った安子は、真和志村の人びととともに、荒野や壕に散乱する遺骨の収集に奔走した。無残な姿で放置された遺骨を拾い集める作業は、戦争の不条理を深く心に刻んだ。これらの遺骨は後に「魂魄の塔」に納められ、軍

民の区別なく犠牲者を悼む祈りの象徴となっている。その後、小学校教諭となった安子は、教壇から命の尊さを説き続けた。自身の過酷な体験を語ることは、深い傷を扶る苦痛を伴うものだが、それこそが隊長から託された責務であると信じ、退職後も「平和の証言者」として精力的に活動を続けている。

安子は、多くの人びとの魂を揺さぶってきた語り手である。小学校高学年で安子から戦争体験を聞いた教え子はその後、沖縄戦研究の道へ進み、2005（平成17）年「沖縄戦を生きぬいた方々の語り合いの場」を立ち上げた。安子が蒔いた「非戦の種」が芽吹き、実践の場として始動した。安子は今も、命を削って繋いだ祈りをさらにその先の世代へと手渡そうとしている。「いかに継承するか」と自問しながら、託したバトンが未来へ繋がり、その歩みを継承していくことを、彼女は強く願っている。

2022年度沖縄県功労者（平和・人権推進部門）として表彰された。（吉川麻衣子）



沖縄戦当時、隠れていた壕のあった場所での当時の状況を説明する翁長安子（左）=2015年5月

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2015年頃撮影)

# 平良啓子

Taira Keiko • 1939-2023

## 命の尊さを教え子たちに 「対馬丸」の凄惨体験、生涯の使命

「陸の孤島」といわれた自然豊かな国頭村の安波に、父宮城徹、母カメの次女として1934（昭和9）年に生まれた。目の前の安波川、太平洋に続く海辺、山の自然の中で育ち、お手伝い上手な活発でおてんば娘であった。物心つく頃は異母兄弟の兄と父親は東京に出稼ぎに出ており、残った母親、祖母、姉、兄、妹、弟と暮らしていたが、戦争の足音が近づく44年の夏、沖縄から九州への疎開を促された。啓子9歳の時であった。

那覇港から疎开学童、一般疎開者約1800人もの人を乗せた対馬丸に兄姉、祖母、いとこら6人で乗船したが、8月22日夜、鹿児島県トカラ列島の悪石島沖で米軍の潜水艦ボーフィン号の魚雷を受け沈没。筏で数日の過酷な漂流の後、奄美大島の枝手久島へ自然漂着。地元の方々の手厚い保護を受け九死に一生を得る。その後古仁屋で父の友人であった津嘉山朝吉氏に引き取られ、半年間滞在の後、45年2月下旬故郷の安波へ戻り家族との再会を果たした。しかしその後、沖縄の地上戦が始まり、山の中での避難生活を余儀なくされ、マラリアの母親と、栄養失調の弟を看病しながらなんとか戦時中をしのぐ。

戦後、徐々に生活の基盤を整え辺土名高校卒業後、母校の安波小学校の代用教員として呼ばれ、教員の道を歩み始める。

その後、同じ教職にあった平良真六と結婚。正規の教員免許を取得後は、東小学校、塩屋小学校を経て中部の宜野湾市に移り、北中城小学校、普天間小学校をまわる。その間4人の娘を出産。北部へ居を構えてからは長男を出産し、喜如嘉小学校、佐手小学校、奥間小学校などを歴任したのち、2度目の塩屋小学校で教員を退職。

対馬丸事件の体験は、教諭時代子どもたちに「平和のために学びなさい」と強調する力になった。教職員組合での復帰運動、米軍による数々の事件事故、子どもたちへの被害に対しては仲間とともに立ち上がり抵抗した。家庭では子どもたちに宿題を言い訳にはさせず、決められた家事の手伝いの当番は徹底した。食べ物好き嫌いもさせなかった。

元来明るくひょうきんな性格と弱いものへの熱い思いやりがあり、教え子たちには体当たりで楽しく厳しくも思い出深い日々を過ごし、慕われた。生活に厳しそうなお子たちには、服を作り、遠足の小遣いをそっと渡し、好き嫌いのある子は側に座って食べ物の説明をしながら給食を完食させた。歌を歌わない子に歌わせ

ようと逆立ちをする約束をし、子どもたちの前で逆立ちをする羽目になったが、子どもは歌うことができた。対馬丸の体験から「絶対に死なない、生きる」ことを子どもたちに語って聞かせ、複雑な家庭環境で厳しい生活の中、その言葉で立ち直る子どもたちも成長し、繋がる教え子や同僚たちとの交流が晩年を支えた。

大宜味村では「大宜味村憲法九条を守る会」の代表を務め、高江のヘリパッド反対の座り込み活動にも定期的に参加し続けた。在職中から対馬丸事件の体験を語っていたが、退職後は県内外の児童生徒を中心に、語り部としてできる限りの講話を続けてきた。頼まれれば断ることなく「対馬丸」を語り継いできたのは生き残った責任と、きな臭くなる社会情勢への強い危機感があった。2023（令和5）年88歳で死去。（平良次子）



「対馬丸と私」と題して講演する平良啓子＝2009年6月11日、大宜味村立喜如嘉小学校（琉球新報社提供）

# 玉木利枝子

Tamaki Rieko • 1934-

## 「戦争を選択しない社会に」 80年の沈黙破り 平和講演1000回超



(2025年12月撮影)

沖縄戦で家族8人を失った10歳の少女がただひとり戦場を彷徨い、その凄絶な体験を92歳を迎える今日まで「沖縄県観光ボランティアガイド」として語り継いでいる。その自身の体験と向き合うまでには癒えることがない深い心の傷を抱えた、孤独で長い沈黙をくぐり抜けなければならなかった。

1934（昭和9）年、東京都豊島区に兄妹の長女として生まれる。父の酒井（旧姓：天願）吟之介は、沖縄県立第二中学校から慈恵会医科大学に進学した医師であった。幼少時に母の嘉子を亡くし、4歳の頃沖縄へ。父親是那覇市若狭で医院を開業。当時は母方の祖母、父、県立二中在学の兄、父方の祖父母、伯父家族、お手伝いの11人が同居する大所帯であった。

44年、那覇市の10・10空襲は自宅の壕で難を逃れる。翌年、父親は第32軍（球部隊）の軍医として召集された。米軍が沖縄島へ上陸し、戦況が悪化する中で祖父は「死なばもろとも」と、出征した2人の息子に一目会うため家族で激戦地の首里へ向かうが、戦禍に絶望した祖母は誰にも告げず自死した。家族はさらに南下し津嘉山から東風平へ。米軍による空からの爆弾、艦砲射撃、火炎放射など凄まじい爆撃にさらされながらようやく見つけた防空壕。入り口で短い時間涼んでいたある日の夕刻、突然爆弾が炸裂し、14歳の兄

の章光が被弾。肩から脇にかけて皮一枚の重症を負い、近くの野戦病院に運ばれるが為すすべもなく死亡した。

この時から幼い利枝子のただ一つの願いは「苦しまず一気に死ぬますように」だった。真壁村（当時）で祖父が被弾し覚悟の自死を図った。残った祖母、伯母、いとこたちと摩文仁までたどり着くが祖母が爆撃で即死した。伯母いとも被弾し倒れ、残酷な戦場で人間としての感情も麻痺した利枝子は、伯母の「早く逃げなさい」という声に押しされ、散らばる死体をさけながらただひとり戦場を彷徨った。そのうち出会った軍属の人から渡された手榴弾でやっと死ぬ、と思ったところ戦争終結を知る。

53年に那覇高等学校を卒業後は放送局関係、沖縄ツーリストや国の外郭団体である雇用促進センター（現・雇用開発機構）で勤務した。

「生き残ったのが利枝子ではなく聡明で優秀な兄の章光であったらよかったのに、と親族の誰もが心のなかでは思っていたのでは」と、80年間誰にも言えなかった深い沈黙を今回初めて吐露した。人間が人間でなくなり、生き残ってもなお苦しみが消えない戦争

体験は一生話すつもりはなかったという。

95（平成7）年、沖縄戦終結50周年記念事業の「平和祈念資料館設立推進検討委員会」に参加したことで気持ちに変化が訪れる。まずは戦後生まれのいとこたちに祖父母や兄の最期を伝えておかなければと書いた戦争体験手記が意図せず活字となり、平和学習講師の依頼がくるようになった。それでも固辞し続けたが、90年代に入り沖縄への修学旅行団体が増加。講師不足に悩む関係団体から懇願され、「ならば一度だけ」と引き受けたのは75歳のときであった。

以来講演は千回を超えるが、慣れることなど絶対はないと言う。「戦場とは人間の努力や頑張りが全く通用しない問答無用の死地の場。戦争を選択しない社会をしっかりと構築してほしい」と地上戦の地獄を生き残り、戦争の実相を知る証人として立ち続け次世代へ希望をつないでいる。

（上間かな恵）



高校生に平和講演をする玉木利枝子 = 2014年、那覇市

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2026年1月撮影)

## 仲井間小夜子

Nakaima Sayoko • 1928-

### 南洋群島で戦争体験 紙芝居で平和を語り35年

1928（昭和3）年、恩納村生まれ。2男3女の三女。38年、国民学校3年生、10歳の時に南洋群島に出稼ぎに行っていた父の呼び寄せで一家はサイパン島に渡り、6年後に近くのロタ島に移住した。その頃、太平洋戦争の戦況がしのび寄る。44年6月ごろ、米軍の空襲が始まった。

翌年の春先のある日、一緒に遊んでいた3人の友達が米軍機の機銃掃射を受け、吹っ飛ばされた。別の日に看護婦と防空壕慰問をしていた途中、機銃掃射を受けた。看護婦は即死。自身は記憶喪失の重症。やがて意識が戻りかけてきた時、取り囲んでいたおばさんたちが「この子、生きてみたいだよ」とささやく声が聞こえた。すぐ側には埋葬用の穴が掘られていた。まさに「死の淵、から奇跡の生還」となった。

46年2月ごろ、ロタ島から一家で沖縄に引き揚げた。その年4月から教員を養成する文教学校に入学、教員免状を1年で取得し、生まれ故郷の恩納初等学校に勤務した。しかし、1年で教壇を辞し、小学校からの夢であった看護婦を目指して沖縄中央病院附属看護学校（のちのコザ看護学校）に入学した。卒業後、名護市屋我地の国立療養所沖縄愛楽園に3年間勤務した。そこで知り合った牧師の仲井間憲文（享年57歳）と26歳の時、結婚した。教職に復帰したのは67年。沖縄市内の中

学校勤務を経て79年に県立美咲特別支援学校に赴任し、91年に退職した。

南洋群島での壮絶、地獄の戦争体験を退職数年前に児童、生徒に伝えるため自作で大型紙芝居(15枚)にし、本格的に語り部のボランティア活動を始めたのは退職後。ロタ島で失った友だちが絶命の間際に発した「小夜ちゃん、生きたいよー」の叫び声は今なお、耳の底から離れない。紙芝居のその場面では思わず涙があふれる。「教え子らを戦場に送らない」。その一心をモットーに学校での児童、生徒、そして県内各地域を回りながら戦争の残忍、過酷、平和の大切さを訴え続け、2026（令和8）年1月に出身地の沖縄市南桃原公民館で体調を考慮して公には最後の紙芝居講話を行った。

その活動にとどまることはない。その間、名護、伊是名、竹富町西表などの介護事業所で勤務し、79歳からは沖縄市内の介護福祉施設で看護師として15年間も務めた。心の安らぎを求めた趣味の琉球箏曲では最高賞、教師免許を取得した。

今、一番の危機感とは自衛隊による南西諸島の要塞化、米軍基地の機能強化。「基地の沖縄への押し付けは構造的差別、ウチナンチュの人権、尊厳がないがしろにされている」と不条理を訴えほぼ毎週2回、退職教員仲間と辺野古基地反対で現地に向かう。じっとしておれない。決して

あきらめない。米軍基地がある故に起きる軍人、軍属らの性暴力、殺人、強盗など犯罪多発に心を痛める。

名誉欲を好まず、あくなき生涯現役の生き様。地域の弱者に寄り添い、「徳を残して財を残さず」の高潔な魂を貫く。人生の師はマザー・テレサ。ウチナーの至言「命どう宝」を心に刻む。凜然としたたずまい。未来の子どもたちに「平和のバトンこそ最高の遺産」として、以前やっていた私設平和文庫の再開を100歳の目標に掲げている。（岸本健）



県立美咲特別支援学校には12年間勤務し、児童、生徒に寄り添い続けた  
=1980年頃

# 中山きく

Nakaima Kiku • 1928-2023

## 語り、祈り、そして行動を 「記憶、風化させまい」



(2019年11月撮影)

人々の前に立ち、平和の尊さを伝えるその姿は、エネルギーで、本当に力強い女性、一方で、ひとたび壇上から下りると、スイーツに笑顔をほころばせ、時にお茶目な表情を見せ、いくつになっても可愛い少女のような一面を見せる、正に剛柔を兼ねそろえたその魅力で、多くの人々を惹きつけ「きくさん」の愛称で親しまれている中山きく。

彼女が人々の前に立ち続け、戦争の悲惨さを伝え、平和を強く願い続けてきたのは、彼女もまた沖縄戦の戦禍に巻き込まれたひとりであったからだ。

1928(昭和3)年11月10日、沖縄県南部の佐敷村(現・南城市)に生まれ、真面目な性格であった彼女は、沖縄県立第二高等女学校(通称:二高女)へ進学した。

二高女を選んだ理由のひとつは制服が素敵だったからと、可愛い一面をのぞかせるも、きくがこの制服を着ることは叶わなかった。彼女たちの入学年度から制服が全国で統一された。同じ服で学校を見分ける方法は校章のみだった。

それでも、二高女の校章に誇りを持ち、勉学、とりわけ英語と吹奏楽部の練習に励んだ、そんなみずみずしい青春時代を奪ったのが戦争だ。英語の授業がなくなり、通常の授業もなくなり、10・10空襲では校舎が奪われ、学徒動員によって学友まで奪われた。

きく自身、戦争の最中に死を選ぼうとした。一緒にいた親友が「死にたくない」と止め、一命はとりとめたものの、彼女の心に「生き延びてしまった」という大きな傷を遺した。

終戦を迎え、空っぽになったきくの心を癒したのが収容所の青空学校で先生となり出会った子ども達だった。そして、戦後は小学校の先生となった。教壇に立つ中で、きくは自信の体験を一切語らなかった。語れなかった。

慰霊の塔に行くも、生き延びてしまったという想いはきくを包み、戦争さえなければ学友達も家族を気づいていたのではないかと胸を痛めていた。

きくを変えたのは、夫の転勤先だった広島で、体験を語る人々との出会いだった。

未来に平和を遺すために自分の体験を語らなくてはと行動に移し、沖縄へ帰ってからは精力的に体験者として語り継ぎを行ってきた。

きくは、自分と同じ思いを後世にさせた

くないと、平和を強く願い、語る中で「祈るだけでは平和はこない。行動しなさい」と伝え、自身の行動する姿を見せていた。

戦後、その体験をすぐに語れなかったきくだからこそ、記憶を風化させてはならないと強い思いを晩年エネルギーに伝えてきた。

きくの「生き延びてしまった」という罪悪感、孫からの「生き延びてくれてありがとう」という言葉により、大きく軽減された。生きていて良かったと思えたと話した。

きくは、2023年1月12日、この世を去った。

しかし、きくの剛柔のエネルギーは彼女が星になった今も、我々に伝える。平和をつかむためには行動しなければならないということ、命をかけて行動の大切さを教えてくれた。

未来を見据えて「行動し続けること」の大切さを自らの行動で見せてくれた女性・きくの想いは、確実に引き継がれている。

(新垣ゆき)



祈りを捧げる中山きく  
=2021年3月3日、  
糸満市の白梅之塔

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2026年2月撮影)

## 外間邦子

Hokama Kuniko • 1938-

### 子どもたちに平和な未来を 「対馬丸」で姉2人奪われる

外間邦子は那覇市泊で1938（昭和13）年11月、外間宏栄とつるの三女として生まれた。2004（平成16）年に那覇市若狭に開館した対馬丸記念館を運営する対馬丸記念会の常務理事を務める。

疎開船「対馬丸」は44年8月、沖縄から九州に向かう途中、トカラ列島の悪石島沖で米軍の潜水艦に撃沈され、分かっているだけで784人の学童を含む1484人が犠牲になった。邦子はその遺族であり、この惨事を伝え続けている語り部だ。

記念館に展示されている2つのランドセルは、対馬丸に乗船し10歳（美津子）と8歳（悦子）で命を落とした邦子の姉のものだ。母親がずっと押し入れにしまい込んでいたため、その存在を知ったのは姉の33回忌の年だった。

邦子にとっての戦争は、沖縄戦が始まる前年の44年、「戦争前夜」の2つの体験だ。1つは姉を奪った対馬丸事件。当時はかん口令が敷かれ船が沈んだことは公にされなかったが、1カ月が過ぎても姉からの音沙汰がなく、家族は2人の死を悟っていた。孫を溺愛していた祖母は、置に仰向けになって胸をかきむしり「半狂乱」になったかのように悲しみをあらわにした。戦後は米国製の缶詰も食べないほどアメリカ嫌いになった。「対馬丸が撃沈されてから我が家が一変ですよ。もう本当にことばも少ない、笑いのない家庭になっ

てしまった」と振り返る。姉の名前を口に出すことさえはばかれた。

もう1つは、対馬丸事件から約2カ月後の10・10空襲だ。鳥の群れだと思いきや見上げていると低空してきたのは「星のマーク」がついた米軍機で、庭の防空壕に逃げ込んだ。「家も自然も文化もすべてを焼き尽くすのが空襲だ」と悔しがる。一家はやんばる疎開を即決。「自分の着替えは自分で持ちなさい。持ちたくなければ着の身着のまま行きなさい」と母に言われた邦子は、お気に入りのサクランボ柄のワンピースとおはじきを背のうに詰め、本島北部へと歩き続けた。「うちの母はとても厳しかった。姉たちを亡くしたことで私だけは失いたくないと思うようになったのか、自分の命は自分で守るしかないという切迫した状況を分からせようとしていたのかもしれない」。

戦後も邦子は母に「甘えた」記憶がない。一家の中心は常に亡き姉2人で、何かを買っても、よそから何かをもらっても、まずは仏前に供える「仏壇経由」。毎朝、仏壇に供えた朝食を下げたあとに自分たちで食べるウサナーの習慣も、母から父、そして、邦子へと引き継がれ80年を超えた。

長年、沖縄赤十字病院で管理栄養士をしていた邦子は妊婦をサポートすることもあり、この世に生を受けた子どもたちの命の輝きを見るにつけ、海の底に眠る子どもたちを思い、命の重みをかみしめてきた。記念館の建設場所を若狭にこだわったのは「対馬丸の子どもたちが故郷をあとにした港に近いほうがいい。子どもたちが戻ってくる場所だから」という理由だ。「対馬丸で命は失ったけど平和の守り神としてよみがえり、未来の子どもたちと一緒に歩むことで生き続ける」。邦子の願いは、今を生きる子どもたちの平和な未来に尽きる。（西銘むつみ）



外間邦子(左端)と対馬丸で亡くなった姉2人=1940年代撮影

# 本村つる

Motomura Tsuru • 1925-2023

## 学友を失った痛恨の思い胸に ひめゆり資料館運営と 次世代育成に精魂傾け



(2005年12月9日撮影)

1925 (大正14)年6月11日、那覇市前島に父・佐久川長吉、母・カマドの長女として生まれた。父の長吉は砂糖販売の委託会社に勤める傍ら銭湯を営み、那覇市会議員も務めていた。つるは七男四女のきょうだいの長女として、小さいころから家事や家業である銭湯を手伝い、忙しい母に代わって弟妹の世話をするなど、母親のような役割も果たした。

沖縄県立第一高等女学校(一高女)を卒業後、43 (昭和18)年に沖縄師範学校女子部(女師)へ進学した。女師・一高女での6年間、徹底した軍国主義教育を受ける一方、勉学に励み、学友たちと明るくはつらつとした学校生活を送った。毎年学級役員を任せられ、要録係や庶務係を務めた。

米軍が沖縄上陸作戦を開始した45年3月23日、つるは学友とともに沖縄陸軍病院へ動員された。本部に配属され、学徒隊を統括する引率教師の補佐を務めた。3月29日、陸軍病院の三角兵舎で卒業式が行われ、つるは最優秀の卒業生に贈られる優等賞と特別賞を受けている。答辞もつるが読み上げる予定だったが、艦砲が轟く中の慌ただしい式であったため、答辞は割愛された。

5月下旬、陸軍病院は日本軍とともに沖縄本島南部へ撤退。約3週間後、突然学徒隊に解散命令が言い渡される。つる

は学友らと壕を出て摩文仁方面に向かったが、砲爆撃で下級生の大舛清子が重傷を負い、米軍が追撃する中、その場に残さざるを得なかった。この戦場で学友を置き去りにした体験、そして沖縄戦で多くの学友を失った痛恨の思いが、後の資料館活動の大きな原動力となった。

戦後46年から84年のうち31年間、那覇市の小中学校で教職に従事した。ひめゆり同窓会が、ひめゆり学徒隊の戦争体験を伝える平和資料館を建設することを全会一致で決定したのは82年6月。11月に資料館建設期成会が結成され活動を開始した。2年後の84年には展示を担当する資料委員会が設置され、学徒隊生存者のまとめ役であったつるがその委員長に就任した。資料館の建設場所や「ガマ展示」をめぐる県の許可が下りず建設が難航する中、つるは同窓会役員、総合プロデューサー、資料委員の調整役として奔走した。先輩から信頼され、後輩から慕われる、つるならではの役回りであった。

89 (平成元年)年、ひめゆり平和祈念資

料館開館後は、運営母体である財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会の常務理事、事務局長、資料館館長、そして理事長などを歴任し、生存者の仲間たちとともに館の運営を担った。とくに公益法人改革に伴う2011年の公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団への移行に際しては、理事長として財務や組織体制の整備に尽力し、苦勞を重ねた。つるは、強く毅然としたリーダー気質の一方で、明るくユーモラスな一面もあり、周囲をよく笑わせた。剛柔あわせ持つ、その人柄は多くの人をひきつけた。

体験者がいなくなった後も資料館が存続し、未来へ戦争体験を伝え続けるため、退任後も証言活動を続け、次世代への継承事業にも力を注ぎ、後継者の育成に努め、2023 (令和5)年4月7日、97歳で永眠した。

現在は、つるら元学徒からバトンを受け継いだ戦後世代の職員が資料館運営と継承活動を引き継いでいる。(普天間朝佳)



展示リニューアルに向けた証言員と職員による検討会議=2019年6月10日、糸満市のひめゆり平和祈念資料館会議室

1章

2章

3章

4章

5章

6章

7章

8章

9章



(2023年4月撮影)

## 山里節子

Yamazato Setsuko • 1937-

### 八重山の環境保護・平和運動に尽力 スィمامニの保存継承活動も

1937（昭和12）年8月21日、電気技師の父栄吉と母トミエの娘として石垣町登野城に生まれた。4歳だった41年に太平洋戦争が開戦。男の子に交じって兵隊ごっこをして遊ぶビギッチャ（おてんば）だった。

祖父母、両親、兄、弟、妹の家族8人のうち4人が戦争の犠牲になった。43年12月、海軍飛行予科練習生の受験のために兄秀雄が乗船した湖南丸は米軍の魚雷攻撃で沈没。遺骨として渡された白木の箱には、枝サンゴのかけらが3個入っただけだった。

45年に入ると石垣でも空襲が続き、2月に生後4カ月の妹勝代が栄養失調のために防空壕で息絶えた。一家は台湾疎開を準備するが、戦況悪化などで実現しなかった。父の姉を頼って疎開した前勢岳の麓はマラリアが蔓延し、母と節子はり患。母は5月に亡くなった。日本軍による6月の強制避難命令で、一家は白水の山中へ。命令が解除されて自宅に戻って間もない8月21日に祖父用恒もマラリアで死んだ。

祖母マヅルに育てられ、八重山高校に進学。琉米文化会館（文館）で英語を学び、文館主催の英語スピーチ大会では反戦・平和を訴えて優勝した。家庭や経済的な事情などで3年の1学期に高校を中退。親子ラジオの会社で港だよりや気象情報を

数カ月読んだ後、米内務省所管の地質調査所の地質調査に助手として携わる。55年5月から2年近く島内を回って、採取した岩石のデータの記録などに従事した。記録をまとめるために東京の米軍極東地図局に移り、地名など地図の詳細を3年にわたって確認。約30年後、調査の軍事利用の可能性を知って落ち込み、贖罪の念を抱き平和運動に尽力することになる。

60年に米国と沖縄を結ぶUSオーバースーズ航空の客室乗務員に採用され、沖縄初の国際客室乗務員として3年働いた。石垣に戻って、文館で英語教室や郷土芸能などに携わり、とぅばらーま大会も担当。歌や踊りなど文化そのものを生活の中で身に付けている人たちとの出会いに刺激を受けた。

69年に退職し、那覇を経て東京へ。八重山民謡研究会（1971年発足、東京・ジラバガ会）や八重山文化研究会（73年発足）の活動を通じて、八重山の自然や文化の豊かさに改めて気づく。交流に触発されて76年に帰郷し、女性たちへの聞き

取りを重ねた。自らも織物を手掛け、日本民芸館展で83年に入賞。登野城ルリ子とスィمامニ（八重山語）の保存継承活動を続ける。

消費者運動で多宇文字と出会い、沖縄県が79年に決定した白保海上への新石垣空港建設計画の反対運動に参加。83年に発足した白保公民館新石垣空港建設阻止委員会の事務局として奔走した。住民の強い反対などで海上案は撤回。白保公民館の国際自然保護連合ピーター・スコット賞受賞に、節子の貢献を讃える声は少なくなかった。

石垣市女性相談員として活動し、国内外の反戦平和活動にも連帯。2016（平成28）年には石垣市での陸上自衛隊配備に反対する「いのちと暮らしを守るオバーたちの会」を結成し、22（令和4）年には第34回多田謡子反権力人権賞を受賞した。現在も市内で毎週日曜に仲間とスタンディングをして戦争への抗議の意思を示し続ける。（河原千香）



第34回多田謡子反権力人権賞に選ばれた「いのちと暮らしを守るオバーたちの会」。左から3人目が山里節子（2022年11月20日撮影、琉球新報社提供）

1  
章

2  
章

3  
章

4  
章

5  
章

6  
章

7  
章

8  
章

9  
章

沖縄戦では、負傷兵の治療や世話にあたる看護要員として、県内10の学校から女子学生が動員され9つの学徒隊が編成された。戦後、「ひめゆり学徒隊」などと呼ばれるようになる9つの女子学徒隊の人数は500人あまり、このうちの200人近くが戦場で命を落とした。10の学校は戦争によって消滅したが、戦後、同窓生たちは同窓会を発足。互いに交流を続け、慰霊祭を行って亡き友しのび、沖縄戦の記憶と教訓の継承に力を注いだ。

### 9学徒隊で「青春を語る会」

#### ひめゆり学徒隊

#### 白梅学徒隊

沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の学徒からなる「ひめゆり学徒隊」は、終戦8年後の1953（昭和28）年に映画『ひめゆりの塔』が放映されたことなどもあり、全国的に知られるようになっていったが、そのほかの8つ学徒隊の認知度は決して高くはなかった。存在が知られるようになったのは、2つの取り組みの成果だと考えられる。

1つは「ひめゆり平和祈念資料館」が開館10周年を記念して99（平成11）年に開催した「沖縄戦の全学徒たち」展。女子と男子で計21あった学徒隊の元学徒に呼びかけて遺品や資料を集め、それぞれの体験を体系的に示し反響を呼んだ。

同年、9つの女子学徒隊の元学徒たちが立ち上げた「青春を語る会」の取り組みも大きい。中心メンバーの1人、県立第二高等女学校から「白梅学徒隊」に動員された中山きくは、会の名称について「自分たちの青春時代は戦争の時代だった」ことを知ってもらいたいと説明した。さらに、若い世代に「私たちにも、あなたたちと同じように青春があった。おしゃれもしたし、恋もした。学園生活も楽しんだ。特別な人が戦争に遭うわけではない」ことを感じてもらいたいという願いを込めた。定期的に集まり、戦争体験を語り合い共有した。バスを貸し切りフィールドワークで戦時中の足跡もたどった。活動は『沖縄戦の全女子学徒隊』として本に記録し後世に記憶をつないだ。

### 北部の戦争知って

#### なごらん学徒隊

フィールドワークでは、今の名護市にあった県立第三高等女学校から「なごらん学徒隊」に動員された上原米子が、今の本部町の八重岳にあった野戦病院の跡にメンバーを案内した。この日のために当時の記憶を絵にし、艦砲射撃で多くの負傷者が出たことや、手術室に行く間もなく亡くなった人がたくさんいたことを説明した。10人が動員され1人が亡くなった「なごらん学徒隊」。北部の戦闘が南部ほどの規模ではなかったため「北部は何もなかったんでしょう」と言われたことがあった。「北部の戦争」を絵とともに、90歳を過ぎても精力的に語り続けた。

### 頼むよ、若い人

#### 瑞泉学徒隊

県立首里高等女学校から「瑞泉学徒隊」に動員された宮城巳知子。フィールドワークで上原米子の証言を聞き、「『あなたたち1人しか亡くなっていないの？ 戦争しなかったの?』って、責めていたような気がする。きょうでその思いが晴れた」と率直に語った。

巳知子は61人とともに戦場に動員され、33人の学友を失った。戦後は故郷の嘉手納町に戻り、四半世紀にわたり平和講話を続けた。309回目の母校で行った講話は、こう結んだ。「あなたたち戦争の話聞いて、ただ『大変だったな』としか思わないでしょ。その大変だったことを起こさないようにするには、自分たちが何をすればいいのか、勉強が必要だ。なんで戦争をするのか、なんで米軍基地があるのか。みんなで力を合わせて、頼むよ、若い人」

# 教訓を継承

西銘むつみ(日本放送協会記者兼解説委員)

## 三つ編みが守った命

### 積徳学徒隊

那覇市にあった私立積徳高等女学校に通っていた仲里ハルは、「積徳学徒隊」として豊見城城址にあった野戦病院壕に動員されたあと、今の糸満市まで撤退した。銃弾が頭をかすめたが三つ編みに当たり難を逃れた。その状況を絵にしたハルは、当初、自分だけを描いていたが、何度も書き直し、自分が助かった瞬間、同じ場所で銃撃され帰らぬ人となった学友を描き加えた。

料理で人をもてなすことが好きな明るいハルだが、戦後、何十年もの間、友を失った南部に足を運べなかった。思い出すと眠れなくなり、処方された薬を飲む夜もしばしばあった。「私しかわからんから。知らせるには書いて見せない。本でもない、戦争の本当の証しだから」と、戦後60年に絵を描いた決意を語った。

## 高齢化と向き合う

### 梯悟学徒隊

私立昭和女学校から17人が動員された「梯悟学徒隊」は、9人が犠牲になった。元学徒の稲福マサは、戦後の慰霊祭に中心となって関わってきた。「友達の亡くなった場面を見ているのが多いんです、私は。なおさらね、忘れられなくてね」。

2005(平成17)年、高齢化を理由に同窓会主催の慰霊祭にみずから終止符を打った。その後も個人で慰霊塔を訪れ、静かに手を合わせていた。

## 学友の無念を想う

### 宮古高女学徒隊

県立宮古高等女学校からは48人が動員され1人が犠牲になった。上原登美子は、『沖縄戦の全女子学徒隊』の中で、「学友の1人も爆風で下半身をやられ、戦後苦しみながら亡くなった。将来は医者になる夢を持っていたのに、なれる人だったのに、彼女の無念さを想うと悲しみはつきない」と証言している。

## マラリアのまん延

### 八重山高女学徒隊

### 八重農女子学徒隊

県立八重山高女学校からは60人が動員された。『沖縄戦の全女子学徒隊』にある八重山高女学徒隊の元学徒7人の証言からは、墓を野戦病院として使っていたことや、負傷した兵士よりマラリアを患った兵士が多く運び込まれたこと、学友1人がマラリアで亡くなり、皆で泣いたことが記されている。

県立八重山農学校から16人が動員された八重農女子学徒隊の元学徒も、「次々と学友がマラリアで寝込むようになった」と証言している。

## 託されたバトン

元学徒は、ここ数年で相次いで他界している。重たい口を開いてつらい記憶を語ってくれたのは、私たちに二度と同じ体験をさせたくない、平和な世の中をつくってほしいという思いからだ。託されたバトンを受け継いでいくことが責務である。



2013年の4・28政府式典への抗議声明を発表した「青春を語る会」定例会。「沖縄には61年前から背負わされた苦難の道が続いている」「これ以上の差別は許せない」と訴えた＝2013年4月、那覇市内(琉球新報社提供)